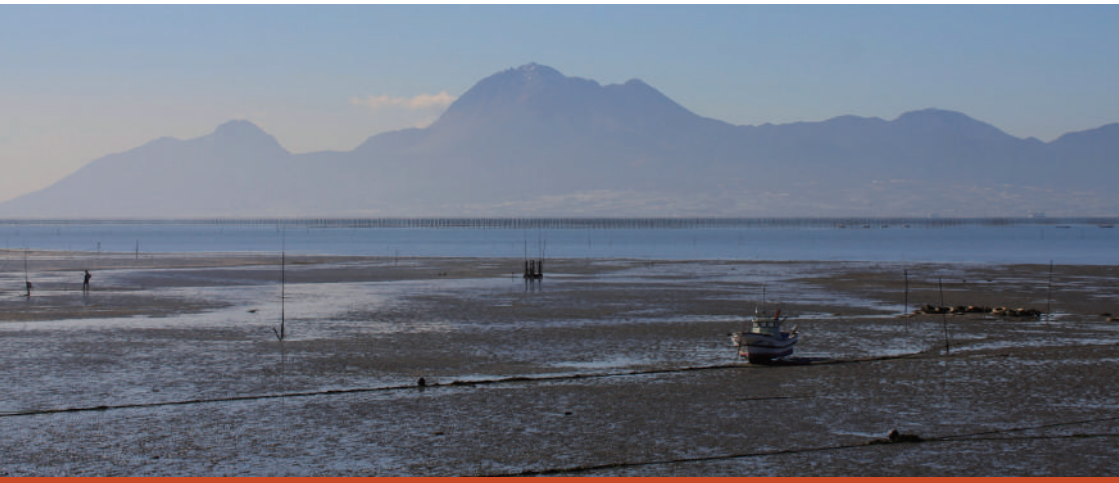
ラムサール条約湿地　熊本県荒尾市

荒尾干潟

荒尾干潟ガイドブック



宝の海を守り育て、いのち集う荒尾干潟を未来へ

たぁいぎゃ　ひろーか　ひろーか　有明海の干潟たい
そぎゃん干潟で採るる　おいしかアサリや海苔
渡り鳥、貝、ゴカイ、豊かな生きもんたち
そぎゃぁん豊かな干潟によりそって
そぎゃん干潟のいきものば　大切ん育てながら、生きる人々
夏んなっと　楽しかマジャク釣りばすったいなぁ
ラムサール条約湿地「荒尾干潟」は
世界に認められた、ほんなこつ荒尾の宝もんたい

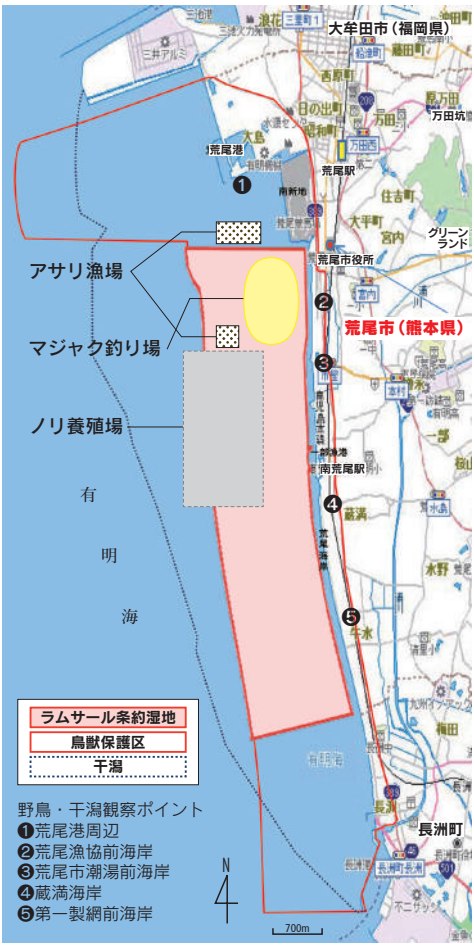
発行：環境省九州地方環境事務所

荒尾干潟の概要

有明海の代表的な干潟―荒尾干潟

荒尾干潟のある有明海には、日本の干潟の総面積の40%にも相当する、広大な干潟があります。有明海の干潟は、干満差６ｍという国内最大の潮汐流によって、川から供給される大量の土砂が奥へ奥へと運ばれることで形成されました。

そんな有明海の中央部東側に荒尾干潟があります。岸から沖まで最大幅3.2km、長さ9.1kmと、単一干潟としては国内有数の規模を誇る砂質の干潟です。



ラムサール条約湿地 荒尾干潟

荒尾干潟の豊かな生きもの

荒尾干潟には流入する大きな河川はありませんが、反時計まわりに有明海をめぐる潮流によって砂や貝殻が運ばれ、堆積して干潟が形成されています。粗い砂と貝殻などからなる砂質の干潟で、歩いても沈みこむことはなく、同じ有明海でも福岡県や佐賀県側に多い泥質の干潟とは性質が違います。

砂質を好むゴカイ類、貝類、小型の甲殻類などの底生生物や、それらを餌にする水鳥、浅瀬を利用する魚類など多種多様な生きものが生息する荒尾干潟は、荒尾に暮らす人々から「宝の海」と呼ばれ、古くからアサリ漁やノリの養殖が盛んに営まれてきました。潮干狩り、タコとり、そして毎年夏には、伝統的なアナジャコ釣りを楽しむ「マジャク釣り大会」が開催され、熊本県内外からの900人を超える参加者が干潟の恵みを堪能します。

秋から春にかけては、シベリアやアラスカなどで繁殖し、オーストラリアやニュージーランドで冬を越すハマシギやメダイチドリなどシギ・チドリ類、日本

で冬を越すカモ類など、数多くの渡りをする水鳥が荒尾干潟を中継地、また越冬地として利用します。

2012年、荒尾干潟中心部の754haが国指定鳥獣保護区の特別保護地区に指定されました。そして、7月に「国際的に重要な湿地」として有明海ではじめて、ラムサール条約湿地に登録されました。

さらに、渡り鳥の中継地としての荒尾干潟の重要性から、2013年、国際協力のもとに渡り鳥の保全を進める「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ（EAAFP）」の重要生息地ネットワークにも登録されました。

荒尾干潟を抱える荒尾市

荒尾市は面積約5700ha、人口5.5万人で、かつては明治時代の半ばから、大牟田市とともに日本最大規模の「三池炭田」を抱える炭鉱の町として栄えました。しかし、戦後のエネルギー政策の転換のなかで石炭の生産は中止され、現在では米や特産の荒尾梨、ミカン、スイカなどの農産物、そして荒尾干潟の遠浅の地形を活かしたアサリ漁やノリ養殖など、豊かな自然に恵まれた農水産業の町です。

荒尾干潟でとれるノリは、香り、つや、歯切れの良さで定評のある「有明海苔」として全国に出荷されています。

近代産業化遺産として公開されている、三池炭鉱の主力坑だった「万田坑」（国指定重要文化財・同史跡）、中国・辛亥革命の祖、孫文と親交があった宮崎兄弟の生家など、近代史の重要な見どころもあります。

西日本有数の規模の遊園地、梨狩りや小代焼作陶など各種体験も楽しむことができ、荒尾市には年間240万人の観光客が訪れています。

干潟は、いのちあふれる宝の海

多くの河川から干潟に運ばれる土砂には、有機物が豊富に含まれています。それらは満ち潮（水没）と引き潮（干出）が繰り返されるなかで激しく攪拌（かくはん）され、絶えず巻き上げられて海水と混ざりあい、海草やプランクトンの餌となります。ゴカイ類やアサリなどの底生生物は、そうして育まれた豊富なプランクトンなどを捕食し、さらにシギ・チドリ類などの渡り鳥は、その底生生物を食べようと、干潟に集まります。

そのほかにも、栄養豊富で波も穏やか、そして水温の温かい干潟や浅瀬は、さまざまな魚類の産卵場所や生育場所を提供し、魚類資源の再生産に重要な役割を果たしてくれます。また、有機物を食べて同化・分解する干潟の底生生物の活動によって、海の水質はたえず浄化されています。

このように、干潟は生物多様性や生物生産性が非常に高い、いのちのゆりかご、そして自然の浄化装置でもあるのです。

ラムサール条約と賢明な利用（ワイズユース）

ラムサール条約とは

荒尾干潟は、2012年７月３日、世界で2054番目の「国際的に重要な湿地」として、ラムサール条約湿地に登録されました。

ラムサール条約は、湿地の保全と賢明な利用を目的とした条約です。ここでの湿地には干潟や湖、サンゴ礁、水田などさまざまな水辺の空間が含まれます。

2014年３月現在、168か国で2177か所のラムサール条約湿地が登録されています。

日本のラムサール条約湿地46
（2014年3月現在）

日本には、北海道13カ所、本州24カ所、九州・沖縄9カ所の合計46カ所のラムサール条約湿地があり、総面積は13万7967.91haです。

荒尾市マスコットキャラクター「マジャッキー」
（熊本県荒尾市マジャッキー #61）

日本は1980年に加入し、釧路湿原（北海道）を国内第１号として、いまでは荒尾干潟など46の湿地が登録されています。そのうち干潟が含まれるのは、千葉県の谷津干潟（40ha）、愛知県の藤前干潟（323ha）、沖縄県の漫湖（58ha）と与那覇湾（704ha）などで、荒尾干潟（754ha）は、その中で最大の面積を誇ります。

荒尾干潟の価値

荒尾干潟はなぜ、国際的に重要な湿地として認められたのでしょうか。絶滅の危機にあるクロツラヘラサギとズグロカモメという鳥類の生息地であることなどが、高く評価されましたが、それだけではありません。アサリの育成のために干潟を耕す作業が生きものを増やしていることなど、干潟と共生する漁業が営まれている荒尾干潟と人々の暮らしが、ラムサール条約で大切にされている「湿地の賢明な利用」の実践である、ということも、登録の大きな推進力になったのです。

湿地の賢明な利用

ラムサール条約は、湿地を守るため、人々が湿地に入ったり利用できないようにすることを求めてはいません。ラムサール条約では、湿地を守るために、湿地に人々が関わり、湿地がもたらしてくれる恩恵を十分に理解することを大切に考えています。

そのためには、湿地が提供してくれる水や動植物、魚貝類や米などといった産物や、その他のさまざな恩恵が「実際に用いられていること」が大切です。つまり、ラムサール条約は、人々が湿地に関わることを決して否定しておらず、むしろ、人間が賢明に利用することを求めています。それが「賢明な利用（ワイズユース）」です。

「賢明な利用」とは、湿地がもたらすさまざまな恩恵が、将来にわたって受け継がれていくような湿地との関わりあい方をいいます。

荒尾干潟ならではの保全とワイズユースの検討を進めるため、環境省は2013年、荒尾干潟と関わりの深いさまざまな団体が集まって意見交換する「荒尾干潟ワイズユース検討会」を開催しました。そして「宝の海を守り育て、いのち集う荒尾干潟を未来へ」という理念のもと、「荒尾干潟ワイズユース基本計画」、「荒尾干潟利用拠点施設基本構想」をまとめました。

今後は、地域住民、行政、関係団体、有識者などすべての人々がそれぞれの立場で、これまでの取り組みの継続と発展と同時に、いま荒尾干潟で必要なこと、やりたいことをみつけ、目標を考え、行動し、ワイズユースの実現をめざしていきます。

ラムサール条約と漁業・ワイズユース

干潟を守る持続可能な漁業

ラムサール条約は、国際的に重要な湿地の選定基準のなかに、２つの魚類基準（基準７、８）を入れています。またラムサール条約の締約国会議において採択された決議Ⅸ．４「ラムサール条約と漁業の保全、生産及び持続可能な利用」のなかで、漁業が社会的、文化的、経済的にきわめて重要であり、干潟生態系が動物性タンパク質の供給、水質浄化などの、多大な恵みを提供していることに着目し、干潟に依存する漁業資源の目録づくりや、持続可能な漁業を通じた干潟の恵みを将来にわたって引き継ぐための計画づくりが、干潟の保全にとっても大切であると指摘しています。

ラムサール条約湿地のワイズユース事例

この考えにもとづき、日本の条約湿地でも、また登録されていない湿地でも、漁業は盛んに行われています。また干潟では漁業以外にも、観光やレクリエーションなどさまざまなワイズユースが実践されています。

宍道湖　島根県東部、揖斐（いび）川水系の下流部にある8000haの汽水湖で、スズキ、モロゲエビ、ウナギ、アマサギ、シラウオなど名産珍味の「宍道湖七珍」で知られ、汽水湖ならではの魚貝類の宝庫。とくに、ヤマトシジミの漁獲量は日本一を誇り、資源を持続可能に利用するため、漁期の制限や小さいサイズの漁獲禁止、水質改善などに取り組んでいます。

三方五湖　福井県の西岸、若狭湾に面したリアス式海岸にある大小５つの湖（約1110ha）です。水路でつながる５湖は、塩分濃度、面積、水深が異なり、水質によって淡水魚、汽水魚、回遊魚など多様な魚類

荒尾干潟の満潮時

が生息していて、日向湖では養殖漁業が盛んです。風光明媚な景観と海の幸で観光客でにぎわっています。

風蓮湖　北海道根室半島の付け根にある海跡湖の風蓮湖（5600ha）は、オホーツク海と２か所でつながっている汽水湖。沿岸に広大な干潟が形成され、ホッキ貝、アサリ、コマイ、ワカサギなどの漁が行われています。湖の富栄養化をくいとめるため、上流部に植林する環境整備活動をつづけています。

厚岸湖　北海道東部、太平洋岸の汽水湖の厚岸湖では、波の静かな環境を利用して、カキの養殖が盛んです。サンマ、サケ、マス、コンブなどの水揚げで知られる厚岸湾とともに、ラムサール条約湿地と漁業のワイズユースの好事例として知られます。タンチョウの生息する湿原のある上流部への植林活動も漁協が行っています。

谷津干潟　東京湾の海岸線から２kmほど内陸、千葉県習志野市にある40haの干潟です。かつて東京湾沿岸に広がっていた干潟のほとんどは埋め立てられましたが、地元の熱心な保護活動で、ここは奇跡的に残されました。渡り鳥の重要な中継地であり、人々の憩いの場として、環境教育の拠点としても知られています。

漫湖　沖縄県那覇市の国場川と、豊見城市の饒波（のは）川の合流点に形成された河口干潟（58ha）で、カニ、ゴカイなどの底生生物が豊富で、渡り鳥の重要な中継地、越冬地です。西岸部にはマングローブ林が広がり、市街地に近く、隣接する漫湖公園などとともに、レクリエーションの場として市民に親しまれています。

荒尾干潟の干潮時

荒尾干潟のめぐみ・宝の海のアサリとノリ

干潟は海の畑

動物性たんぱく質の豊富な干潟は、「海の畑」ともよばれ、昔から漁業が盛んに行われ、地元の人々の暮らしを支えてきました。「荒尾市史（環境・民俗編）」（2012）によれば、荒尾干潟には、イソギンチャク、ゴカイ、アナジャコ、エビ、カニ、アサリなど80種の底生生物が生息しています（1988-89調査）。

有明海には、日本国内でここだけに生息する「特産種」や、有明海以外にはまれな「準特産種」の生きものが数多くいますが、そのうちハゼグチ、ムツゴロウ、ヒメケフサイソガニ、ヘイケガニ、ミドリシャミセンガイなどが荒尾干潟にも生息しています。また、コノシロ、ウシノシタ、マガレイ、アナゴなど100種を超える魚類の生息も確認されています。

荒尾市の漁獲の上位20種のトップが、アサリなど干潟の貝類で、20種合計漁獲高の７割を占めています（2011年統計）。しかし、その絶対量は、「宝の海」とも呼ばれた往年にくらべて激減してしまいました。

荒尾漁業協同組合では、干潟環境を改善するため、1988年ごろから干潟を耕す作業をつづけてきました。

毎年２月と７月、潮の引いた干潟にトラクターを入れ、田畑の土を耕すように砂地を掘り返すのです。干潟の砂地の奥まで酸素がゆきわたり、プランクトンが育ち、それを食べるアサリが増えていきます。それを漁師さんは「アサリがわく」といいます。アサリが大量に発生すれば、赤潮の原因にもなるプランクトンが減り、おいしいノリを育てる海の水質を守れるようになります。荒尾干潟のアサリは、むかしもいまも荒尾干潟で育った地元のアサリです。

干潟の海とノリ

有明海はノリ養殖の盛んな地域で、「有明海苔」として全国に知られています。かつて養殖ノリの生産地ナンバーワンは、広大な干潟が存在していた東京湾で、「浅草海苔」が有名でしたが、東京湾の干潟は９割以上が埋め立てなどで消失し、いまでは全国のノリ生産の４割を有明海産のノリが占めています。

荒尾干潟を活用してのノリ養殖が本格的にはじめられたのは1950年代で、一時は、400戸を超すノリの生産者がいたといわれます。干満の差が大きい遠浅の地形を利用して、ノリ養殖は現在も盛んに行われ、アサリと並んで、荒尾干潟の主要な生産物の１つです。

荒尾干潟のノリ養殖作業は毎年９月に始まります。沖合いの干潟に数万本の支柱を突き立て、10月ごろ水温が23度に下がるのを待って、ノリの種（胞子）をつけた網を結びつけます。

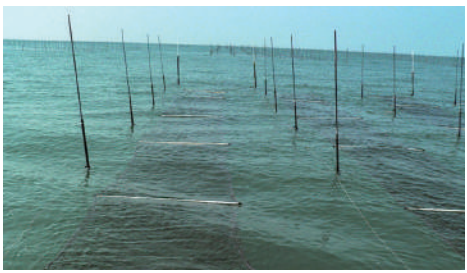
１日２回、満潮と干潮をくりかえす波にゆられて、ノリの芽は次第に育っていき、はじめは赤かった色がだんだん黒くなる11月ごろからが収穫期となります。ノリの収穫は、春のはじめ３月までつづきます。

赤潮の発生や、海水温の上昇は、ノリの収穫量に大きく影響するので、干潟の海の浄化、再生は、荒尾干潟の大きな課題となっています。

秋から冬にかけて沖合をノリ養殖の支柱がびっしりと埋め尽くします

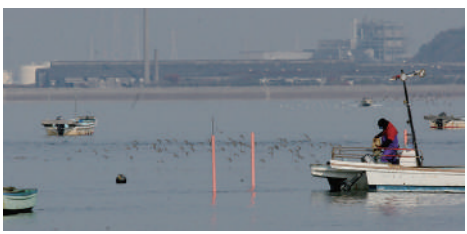
トラクターで砂地を耕します

干潟は畑のように整然と耕されます



海面に立てられた支柱にノリ網を結びつけます

耕した干潟に荒尾産の稚貝をまきます



漁船の間をぬうように飛ぶシギの群れ

荒尾干潟のめぐみ・むかしの漁業と海辺

地引網漁（左）とアミ漁（右）のようす

家族総出のアサリの収穫です（左・中・右）

むかしはこんなにアサリがとれました

荒尾干潟では、むかしから漁業が盛んでした。ここに紹介した写真は、いまから50～60年前の昭和30年前後のようすです。沖の干潟でとったアサリは舟に積み、潮が満ちてくるのを待って岸に運びました。シオフキやタイラギ、サルボウもわくようにとれました。水のきれいな海では、夏になると海水浴を楽しみました。荒尾干潟は「宝の海」でした。

夏は海水浴客でにぎわいました

むかしは竹を利用してノリを育てました

1枚1枚手づくりされたノリは天日干しされました

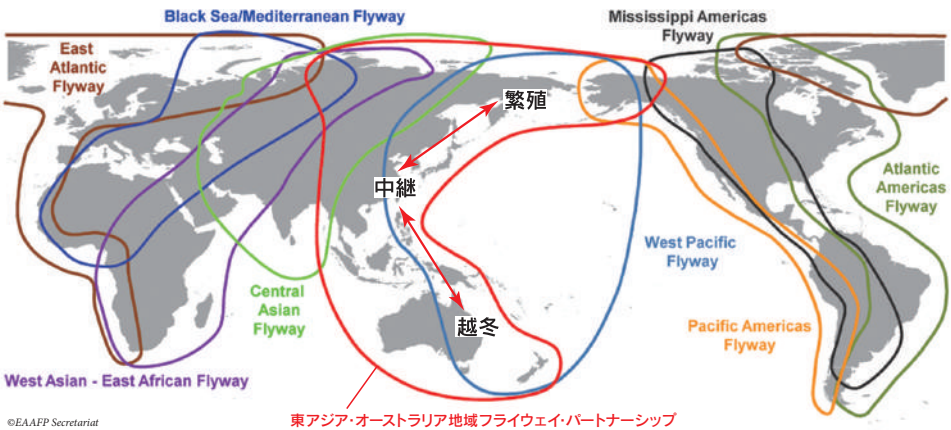
荒尾干潟は渡り鳥の重要な中継地・越冬地

渡り鳥の有数の飛来地

荒尾干潟には、多数の渡り鳥が飛来します。とくに多いのがシギ・チドリ類で、秋から春にかけて飛来し、中継地、越冬地としてここに滞在します。秋にはシロチドリ、キアシシギ、ダイゼン、トウネン、ソリハシシギ、メダイチドリなど、冬にはハマシギ、シロチドリなど、そして春にはオオソリハシシギ、ダイゼン、キアシシギなどが多く見られます。

環境省が実施したモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2008年春期と2011年冬期の調査では、荒尾干潟のある荒尾海岸での観察数は、全国２位を記録しました。

そのほか、環境省のレッドリストで絶滅危惧ＩＢ類に指定されているクロツラヘラサギや、同じくⅡ類のツクシガモ、ズグロカモメなどもここを利用し、渡り鳥にとって、荒尾干潟はかけがえのない中継地、越冬地



①バードウォッチングを楽しむ　②ノリ網にとまったシギやチドリ　③ダイシャクシギ　④ダイゼン　⑤オオソリハシシギ　⑥ズグロカモメ　⑦荒尾市の鳥となっているシロチドリ

となっています。荒尾干潟の豊かな生物多様性が、多くの水鳥の命を支えています。

荒尾海岸には、これら渡り鳥を観察するのに適したバードウォッチングポイントがいくつかあります。Ｐ２の地図を参考に、長旅の疲れをいやす鳥たちを、温かく見守ってください。

フライウェイ・パートナーシップ

北極圏やシベリア、アラスカの繁殖地から、オーストラリアやニュージーランドの越冬地まで、渡り鳥は毎年、長い距離を移動します。世界には、主要な渡り鳥の渡り経路として９つのフライウェイがあります（図参照）。

日本が含まれるのは「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ」で、シギ・チドリ類、ツル類、ガンカモ類を中心として、世界的な絶滅危惧種28種を含む5000万羽以上の渡り性水鳥が生息しています。

日本で記録された鳥類の種類数に占める渡り鳥の割合は、本州、四国、九州では60％、北海道と琉球列島では80％にも及び、日本列島は渡り鳥にとって重要です。

「東アジア・オーストラリア地域・フライウェイ・パートナーシップ（EAAFP）」は、渡り鳥の保全に関わる国際的な連携・協力の枠組みで、鳥類の重要生息地の国際的なネットワークを構築し、普及啓発と保全活動を促進することを目的とした国際的な協力事業です。

現在、「EAAFP」に登録されている日本の重要生息地は漫湖（沖縄）、中海（鳥取）、藤前干潟（愛知）、谷津干潟（千葉）、佐潟（新潟）、蕪栗沼・周辺水田（宮城）、クッチャロ湖（北海道）など30か所で、荒尾干潟もその１つです。荒尾干潟は鳥たちが渡りをつづけるために、なくてはならない大切な場所です。

楽しいマジャク釣り

干潟に生息する甲殻類のアナジャコのことを、荒尾では「マジャク」とよびます。シャコという名前がついていますが、ヤドカリの仲間です。

干潟に１～２mの深い、Yの字型の巣穴を掘って生活するこのマジャクを、巣穴に毛筆を差し込んで釣り上げるのが「マジャク釣り」で、巣穴に入ってくる異物（外敵）を排除しようとする習性を利用した、有明海伝統の漁法です。

荒尾干潟では毎年７月ごろ、「荒尾市マジャク釣り大会」が荒尾漁業協同組合と市が協力して開催しています。市内のマジャク釣り名人の指導で挑戦するマジャク釣りは、県外の人もたくさん参加する荒尾干潟の夏の風物詩で、2013年は約900人が参加しました。

釣り上げた体長10センチほどのマジャクは、天ぷら、煮つけなどにするとエビに似たおいしい味です。

①マジャク釣り大会は干出した沖の干潟で行われます　②③体長10cmほどのマジャク　④天ぷらにされたマジャク　⑤⑥砂を少し掘って、巣穴に毛筆を差し込み、釣り上げます

干潟を守る人々

市民と荒尾干潟保全・賢明利活用協議会の活動

荒尾干潟では、近年、水質の悪化による赤潮などの発生や、資源の減少などで漁獲量が減少していることを受けて、漁協が中心となって干潟の掘りかえしや砂を撒くなどの再生事業を行っています。

また、荒尾市の有明海に面した地区の住民は、松並木の保存や、海岸清掃、日本野鳥の会熊本県支部と連携した定期的な探鳥会や調査活動の開催など、有明海の自然を守っていくための活動をしています。毎年８月には有明海沿岸４県による有明海一斉海岸清掃も実施されています。

ラムサール条約登録を受けて、荒尾干潟や周辺地域の環境を保全、再生し、渡り鳥はじめ干潟の生きものの保全とワイズユースを推進することを目的に、地元の漁協、商工会議所、観光協会、日本野鳥の会熊本県支部、荒尾市などによる「荒尾干潟保全・賢明利活用協議会」が設置されました。定期的に会合を開き、普及のための看板をつくったり、シンポジウムを開催したりするなど、ラムサール条約と荒尾干潟に関する普及啓発活動を行っています。

市民参加の海岸清掃（上）と海岸のハマゴウの花

荒尾市の観光と物産

万田坑　明治35（1902）年操業開始の万田坑は、大正・昭和初期の主力鉱の１つでした。当時のままに保存されている一部が公開されています。

宮崎兄弟生家　辛亥革命で知られる孫文と親交があった宮崎滔天ら宮崎兄弟の生家と資料館です。

グリーンランド　高くそびえる観覧車がランドマークの九州最大級の遊園地です。家族づれなど年間100万人が訪れます。

荒尾梨　品種は実の大きい新高梨で、千葉県についで全国２位の生産量を誇ります。

小代焼　荒尾市東部の小岱山（501m）山麓の赤褐色の土で焼かれた陶器。九州を代表する焼き物のひとつ。

荒尾ノリ　栄養豊かな有明海の海に育てられた、肉厚で、色つやがよく、歯ごたえのいいのが特徴です。

ノリしょうゆ　濃口しょうゆに荒尾産のノリのエキスを10～30％配合した、ノリの産地、荒尾ならではの調味料です。

メロンパン　地元の人が大好きな、隠れた「名物」です。皮が薄く、うす甘で、やわらかい逸品です。

アクセスガイド

交通

鉄道

博多駅～荒尾駅（特急50分）
熊本駅～荒尾駅（特急30分）

道路

九州自動車道、南関IC・菊水IC（車で40分）

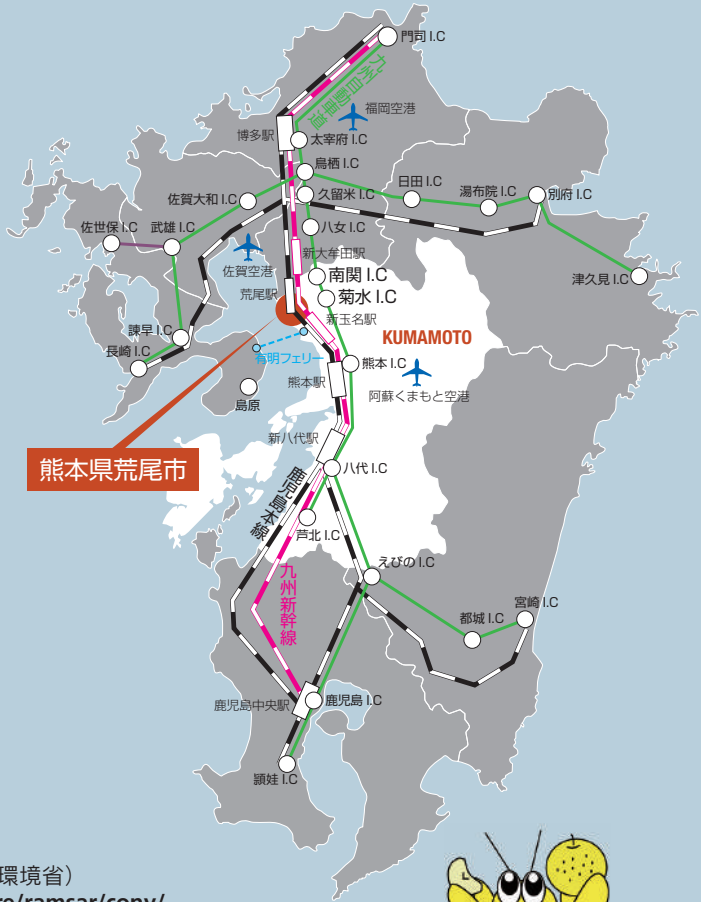
航路

長崎県多比良港～熊本県長洲港（有明フェリーで45分）

空路

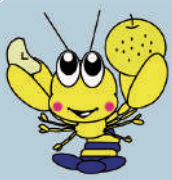
福岡空港から直行バス（荒尾駅）で90分、佐賀空港から車で70分、熊本空港から車で90分

荒尾干潟（蔵満海岸）は、JR鹿児島本線南荒尾駅から徒歩5分、荒尾駅からはタクシーで10分のところにあります。



情報

- ラムサール条約と条約湿地（環境省）
  http://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/
- 荒尾市役所　**http://www.city.arao.lg.jp/**
- 一般社団法人 荒尾市観光協会　**http://arao-kankou.jp/**
- 日本野鳥の会熊本県支部　**http://torikuma.com/**



荒尾市マスコットキャラクター
「マジャッキー」
（熊本県荒尾市マジャッキー #61）

ラムサール条約湿地　荒尾干潟ガイドブック

発行：環境省九州地方環境事務所　©環境省2014
熊本県熊本市東区尾ノ上1-6-22（〒862-0913）
九州地方環境事務所　☎096-214-0339
Website: **http://kyushu.env.go.jp/**

製作協力：荒尾干潟保全・賢明利活用協議会、荒尾市
写真提供：西村誠、村中猶由規、荒尾漁業協同組合、荒尾市
編集協力：ラムサールセンター
デザイン：安部彩野　印刷：株式会社藤和